

# 農地におけるニホンジカ集中捕獲後の低密度状態維持のための捕獲モデルの検証 令和元年度（国補：鳥獣被害防止総合対策交付金）

川島直通

集落周辺における ICT を活用した大型囲い罠と集落の後背山林においてくくり罠を活用する農林併行捕獲により、シカ密度の早期の低減が実現することがわかっているが、その状態の維持についてはさらに知見を蓄積していく必要がある。そこで本研究では、シカの低密度化に成功した地域において農林併行捕獲を行い、シカ低密度状態の維持について検証することを目的とする。

## 1. 実証モデル集落の概要と密度状態維持の検証方法

三重県伊賀市に位置する子延集落では平成 29 年から農林併行捕獲を実施し、密度低減が実現している。この集落の東側において、農地における ICT 囲い罠による捕獲と併行して、後背山林においてくくり罠による捕獲を実施した。シカの密度状態を把握するため、集落の農地後背山林に設置した 16 台の自動撮影カメラにより月ごとのシカ撮影頻度を記録した。

## 2. 農林併行捕獲によるシカの捕獲実績

子延集落では農地周辺において ICT 囲い罠により平成 26 年以降シカの集中捕獲を実施している。また、平成 29 年 3 月から平成 31 年 3 月までは農地周辺の捕獲に加え、くくり罠による後背山林における捕獲を実施しており、子延集落の東側において農地周辺で ICT 囲い罠により 32 頭（農業研究所データ提供）、後背山林でくくり罠により 22 頭のシカを捕獲している。当地域において、令和元年 8 月～令和 2 年 3 月までの間、後背山林でのくくり罠による捕獲を実施した。この際、シカの誘引餌としてヘイキューブを用いた。また、くくり罠の設置箇所付近に通信機能付き自動撮影カメラを設置し、シカの出没状況や餌の採食状況を観察し、くくり罠の移設時期を判断した。その結果、5 頭のニホンジカを捕獲した。なお、平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月までの期間、ICT 囲い罠を用いて農地周辺で 7 頭のシカが捕獲された（農業研究所データ提供）。

## 3. 自動撮影カメラ調査による密度状態の検証結果

後背山林に設置した自動撮影カメラによるシカ延べ撮影頻度のカメラごと、月ごとの平均値を算出したところ、シカ密度が低減していた平成 30 年度に引き続き、令和元年度も概ね密度状態が維持されていることが確認された。ただし、平成 30 年度と令和元年度の同月のシカ撮影頻度を比較すると、令和元年度の方が高くなった月も存在した。平成 29 年度や平成 30 年度に比較して、令和元年度の捕獲頭数が減少しているため、今後の密度状態の推移について注意して観察していく必要がある。